

Kodak  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

Black

A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

13

14

15

B

17

18

19

州豆  
熱海誌  
大内玄齋  
完

ル 4  
3179





藹々居士編選

# 豆州熱海誌

戊寅九月  
真誠社  
不盡閣  
同梓

## 熱海誌題詞

熱海真賞

負山抱海形勝雄異人

流  
瀟長此中一洗簪紳華縉習

別開霸府無限功武門執權

今已矣地出靈龜多永不已治

效神奇甲技業年三救活

熱海志

中村敬宇先生題詞

162

東京  
學校

明治三十年六月八日



爲人死。昔有七名。今倍蓰。  
 田塍所穿。見清泚。況有好  
 景。怡心目。造物布置。物乃  
 爾。江陵。六月。晁。鏐。金。朱  
 以甲第。汗成浴。競來此地。取  
 休沐。冠蓋車馬。亦追尋。招引

王公輕羈旅。賺得洋商  
 傾囊貯。况療其病。施以恩。權  
 勢何敢讓。霸府。我久欲往浴  
 靈泉。菴途局促。苦無緣。忽  
 讀。變公好記筆。遊意勃  
 然。骨欲僊。我知溫泉有神道。



借手大雅廣其傳。人間勢  
力浮漚耳。嗟汝熱海有

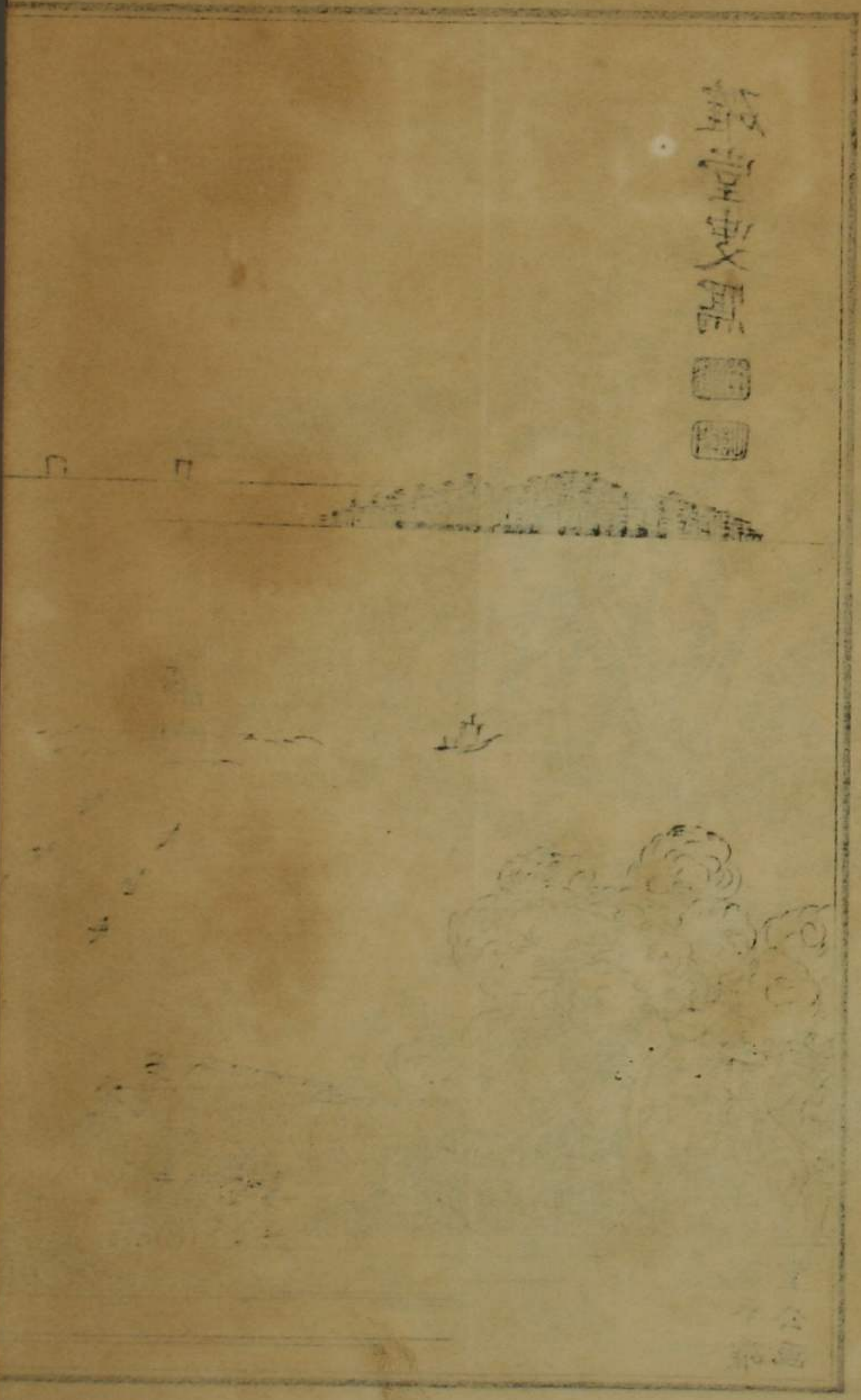
真權。

明治十一年八月二十日

江都敬字中邨正直



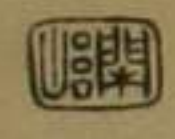
敬字中邨正直







確堂叟寫



松平確  
堂公画

江都敬字中邨正直





熱海誌目録

○地理、熱海 湯瓦原 和田 水口

○温泉、大湯 清左衛門湯 法齋湯 風呂

の湯 左治郎湯 野中の湯 水の湯 福

島屋の湯 勘兵衛湯 仲の湯 醫王寺の

湯 古屋の湯 小林の湯 温泉性質 主

○治效用、浴法及び内服法 温泉湧出の来

歴

○湯戸、浴室 席 婢 食料

○山川名勝、上野山 和田山 念佛山 魚見



入山 天神山都松旧跡 糸川 初川 和田川

錦浦觀音窟 日金山十國峠 伊豆山古々井の森

網代港根越觀音 初島 鸚鵡石 一杯水

○社寺并行殿、湯前社 来宮 和田八幡

今宮 天神祠 紀僧正真濟畧傳 温泉寺藤房入道略傳

興禪寺雲居略傳 海藏寺 醫王寺太田駒千代墓 潮

音寺 大乘寺 誓欣院 行殿舊趾

○産物、樟材什器 雁皮紙 壁土 赤石脂

塩温石

以上六綱五十九目



豆熱海誌

○地理

熱海郷を伊豆國加茂郡葛見の庄に係る昔は湯瓦原

和田水口三ヶ村を合せ田額六百四十三石二斗九升

九合一斗六升六合と稱し韭山代官の治に属し海山

の賦を皆伊豆神社の社領たり而して今は耕地九十

町餘宅地十町餘山林未詳民戸三百三十餘戸をべて静岡

縣の管轄に属す抑伊豆の國を東海道の東南隅に突

出西北に富士山を受け北に箱根の嶮を負ひ東南

東京 藹々居士編





西の三面を皆大洋をめぐり一國の形勢斜にして且  
 は細く周田六十餘里とを之を君澤田方加茂那賀の  
 四郡に分ち國中甚だ高山多く殊に天城真城達磨日  
 金伊豆等の諸山其脈互に相聯絡し山溪海岸處々  
 温泉湧出し其數ほとんと二十餘ヶ所に及ぶ即ち古  
 奈修禪寺船原吉奈湯ヶ島土肥二條手石蓮臺寺横川  
 湯ヶ野小鍋奈良本松原畑毛大澤峯伊豆山熱海等亦  
 れあり然れを此國と伊豆と稱するは湯出の國の約  
 言にして本邦温泉の出る所頗ぶる多しと雖とも實  
 は此國を以て第一とを而して熱海の泉その名尤

も世より知られ治病の効も亦著るしといふ  
 ○熱海郷を豆州一國の東北隅伊豆山の南日金山の  
 東麓より北の方小田原驛を距るおと七里西の方  
 三島驛へ五里南下田港へ十八里を距つ三方山とを  
 ぐる三冬と雖とも北風及び西北風の暴烈あるを  
 拒ぎ唯東南の一隅は蒼海を開き常に新鮮ある海風  
 と受く故に其氣候温和にして夏冬とも甚だ其寒  
 熱と凌ぎ易しとを正面海路三里をへだて初島と翠  
 浪白波の間を望みそをより南十數里よりあさり遙に  
 大島と水天髣弗の際に見る



○湯瓦原村まゝ磯山の里と称せしとあり然るも  
 今を兩名皆称せむ今と距る三百五十年前まで湯瓦  
 湯前神社造営の棟札に依て知らる此單は熱海村と  
 札今富士屋喜右工門の所藏は係る是則ち温泉湧出の本  
 称し和田水口二村と属里とを是則ち温泉湧出の本  
 里あり街區十一分本町濱町新宿荒宿横町新横  
 町東阪町小澤二軒茶屋上宿大をあり池他横磯比良  
 保等ゆ小名ゆり都て和田村まゝ片平ゆは本里の南  
 五十三區ゆり都て和田村まゝ片平ゆは本里の南  
 七八町念佛山の麓はあり民戸凡四十餘農夫漁者雜  
 居たり其西北五六町入山は傍ふて人家凡そ十三四  
 戸ありと水口村とを人民みお耕樵を兼ね而して本

里を民戸凡そ二百七八十戸農工商賈漁夫樵者軒と  
 聯ねて雜居し稍小聚洛の体裁とあせり

○温泉

温泉湧出の原地昔も七湯と稱を即ち大湯清左衛門  
 湯法齊湯風呂の湯河原の湯左治郎の湯野中の湯二  
 れあり而して今も處々は新泉湧出し則ち水の湯仲  
 の湯福島屋の湯勘兵衛湯醫王寺の湯古屋の湯小林  
 の湯等もべて十五ヶ所とある此他海岸田園到る處  
 にはけりに深く之を穿てて温泉湧出さざるなく真  
 熱海の称は背りきと謂つべし



○大湯 本町の上手西側は在り晝夜各々三回時を  
 違へざして湧く但時ありて長湧せるおとらり長湧  
 を概祿十二時間とせ例へて午前六時は湧出れど午  
 後五時ニ至りて止む長湧止めど又十二時間長休を  
 則ち午後六時より翌日午前五時は至るまで一滴を  
 り出さざるが如し其後五七日間湧出の度量常あら  
 ども凡そ十日を過ぎて始めて常は復も其湧出づるや  
 初め疊石の間は於て蟹の目の如くは煮立ち漸く湧  
 て遂は沸騰せるに至りてを恰も數箇の大唧筒を以  
 て熱湯を灑ぎ出さるが如く二三間へだりたり大石

は熱湯を吐く其勢ひ響きは雷の如く蒸氣を雲  
 の如く濺沫熱雨とふして近前をべのく故は四方  
 數歩の地水柵を廻らして其危害を避く聞く支那國  
 安州の潮泉を一日は三溢三蘸一撫州は一日三潮の  
 泉あり蜀は六時泉あり滇中は百刻泉なり又瑞西國  
 のエングストレーブリュン泉を毎年五月中旬より  
 八月中旬まで毎日午後四時より午前八時を限りて  
 湧出り以太利國のウイラフリニア泉を一日三回  
 時期を定めて湧き佛蘭西のコルマンあり或る温泉  
 を毎七分時間は流出せと然れども本邦に在りてを



熱海の外まゝ此の如き温泉ありと聞き蓋しウア  
 ルトン氏の温泉論に依れば此の如き温泉を必き海  
 邊に近くして數派も出路を開き其中の一箇を海中  
 より口を開き満潮の時其泉口海水は壓塞られて流出  
 づる水と能てむ却て其水槽は流反り出路を他口は  
 取て噴出を止めよて此等の泉と名けて間泉と稱せ  
 といふ昔を温泉沸畢る比に至り甲蟲數千群り翔り  
 遂に熱湯に混じり流を去り然るに文化の頃僧徳  
 本東京駒込一其奇怪にして且つ愍れむべき状あり  
 行院開基と修し浮屠と建しとり此蟲再び出たむ  
 と以て梵法と修し浮屠と建しとり此蟲再び出たむ

といふ里俗相傳へて靈感と名せ石浮屠今尚柵中  
 あり又其傍に石佛數軀と安置を僧觀誓東京淺草等  
 の建る所といふ又英國ニニストルライトオノレ  
 グルアルコツク氏万延元年七月此泉に浴し建る所  
 の石碑あり數十言と勒せ愛山海奇勝之餘建此石使  
 後人知英人遊于此自吾輩始の語あり  
 ○清左衛門湯 濱町の北裏天神山の後より晝夜  
 流ねに湧出て絶へて下皆相傳ふ昔に農民清左衛門  
 出の泉窟に陥りて死せり故に名く  
 ○法齋湯 又平左衛門湯と稱せ小澤にあり故にま



と小澤の湯と称せし泉源二ヶ所一は澤口彌左門の  
 宅地あり一は藤井文次郎の庭中湧く義堂日工  
 集り曰く義堂と夢窓慶安八年二月二十六日飯罷與  
 諸子出遊或村巷或僧舎有道人指一地曰嘗平左門  
 肆虐為害據此地造館臨誅屋陷地中人皆云活墜地獄  
 至今呼曰平左門地獄と蓋し此泉窟といふ歟  
 ○風呂の湯 阪町大木園藏高砂屋との庭中湧出  
 す

○河原の湯 東の濱邊に在りもと瓦の湯と称せ蓋  
 一寛文六年小田原城主稻葉美濃守村民の為に浴室

と構へ瓦を用了其屋を葺り故に里俗呼了瓦の湯と  
 称せしとぞ

○左次郎の湯 濱町醫王寺の門前上杉助七の庭中  
 あり此湯専ら眼病を治む故に眼の湯と称せ又湯

火傷を洗ふて奇効ありといふ

○野中の湯 小澤の北上野山の麓ある田畝の中に  
 おり晝夜湧出せれども人浴せざ此辺地を穿てぞ隨

處に熱泉湧出せ

○水の湯 阪町芥川文平若松屋の庭中より淡泊  
 無味常水温めたる者の如し故に名く



○福島屋の湯 阪町風呂の湯の東隣松尾惣兵衛

屋の庭中湧く

○勤兵衛湯 濱町醫王寺の門前左次郎湯の隣家山

本五兵衛と江戸屋の宅後在り

○仲の湯 濱町高橋松吉の宅地湧り 今そ升屋某

云

○醫王寺の湯 二泉湧り 近來一泉を得たりと

云

○古屋の湯 内田市郎 小林の湯 人見 等みふ其庭前

湧出を故に名く

○温泉性質 各所に湧出をる 温泉大小深淺各々其

差なきは非ざと雖どもさべて清徹明淨ふして臭氣

なく其性不功用に至りて水湯を除くの外各泉大

同小異皆其味ひ苦く且つ鹹也一蓋一此温泉を塩

鑛水よりて其中多量の格魯兒亞爾加里及び格魯兒

土類少量の硫酸塩類を含有せりとゆふ其温度を湧

出の時間随ひ又その泉窖に随ひて少差なきは非

むと雖ども大凡皆沸騰點以上は達せざるを嘗

て司藥場は於て教師マルチン氏の分析せし所の定

量表より即ち左に出を



鑛水一千立方センチメートル即ち一リートル  
中左の成分と含む

格魯兒曹胃母 三、七、九〇〇

格魯兒麻屈涅叟母 二、三、三三〇

格魯兒剥薦叟母 一、八、一〇〇

格魯兒加爾叟母 一、七、六七〇

硫酸石灰 〇、一、九三〇

重碳酸石灰 〇、〇、〇四二

重碳酸化鉄 〇、〇、〇三一

珪酸 〇、〇、〇一〇〇

第一格魯兒滿登

有機物 痕跡

格魯兒剥薦叟母 同

格魯兒曹胃母 同

總量一〇〇一〇三瓦蘭

○主治効用 古來諸家の説區々より予の醫學よ

通ぜざる固より其何れも據るべきを知らざれとら

今且らくドクトルホルマン氏の説に依れば此温泉

の主成分を食塩より格魯兒剥薦叟母格魯兒麻屈

涅叟母と少く含めり其他の元素を甚く少く含めり



了敢て效用とをさよ足らざるも今曾て久しく經  
 験せし歐洲中の温泉の尤も類似なる者も就き其主  
 治効用を示さず小児の腺病及び之より生ずる諸症  
 風湿及び慢性の痛風患者の堪へき熱度は從て力の  
 の百四度列氏の炎性滲出に於て其炎既退くの後  
 三十三度まで也  
 滲出物の吸収と催進を脈管外水液漏出及び通常の  
 水腫に於て又吸収と催進するの効有り脚氣の水腫  
 と兼る者皮膚の神経痛等も皆おの泉も浴をべし又  
 慢性曹傷風及び慢性下痢慢性の咽喉及び氣管支傷  
 風慢性膀胱傷風慢性腔及び子宮傷風  
 浴法及び陰門注射法と並用

一 膽管の慢性傷風慢性の胃及び腸傷風より發せ  
 る鬱憂症等にて殊に其運行怠慢および皮膚或は粘  
 液膜の弛緩せしものよを兼て此泉と飲料とする  
 要也と又近江の中島桑太氏の説に依れ慢性癩麻  
 質斯癩瘰脚氣麻痺病癩毒眼病子宮病皮膚病及び皮  
 膚の衰弱に因りて發する所の諸病と治し又之を内  
 服せねば緩軟下痢を起し胃の運営を進め飲食の消  
 化と促し肝脾及び腹間膜等の閉塞と疏通し兼て  
 血脈の循環と健をよむとゆふ釋惠頓の紀行泉谷瓦  
 曰く試把草花竹葉浴熱湯則萎亦侵水一箋茶時則忽



生色復水一浴者不復墜散と抑靈泉の徳中々非情の  
植物も及ぶ歟

○浴法及び内服法 病症及び身体強弱の差異はる

は随て其温度及び入浴の度数時間等は差異あるを

得ざると雖ども今且らくドクトルホフマン氏の説は

依せど大凡温度を華氏の寒暖計九十八度より乃至

百度即ち列氏の二十九度乃至三十八度を以て適宜と

し毎日一回乃至二三回入浴し時間を十五六分より

乃至三四十分時を以て適宜とすべし又おれを内服

せざる者も四号乃至十二号 一号を我々の七々五分六厘  
五毛餘をせ一日の飲料

凡そ一合五合より乃至四五合と一日の量として毎日

一二回おれを服す但毎朝或は朝夕は於て單に之を

用ひすとして水を加へ了之を飲むべしと浴後速に

衣服を着し決して直に外氣に觸れざるを要す浴者

慎んで一時の小快を取り温泉浴治の效用を損せら

勿れ又浴客の切に注意を要すべきことあり即ち俗

に謂ゆる湯中おれを蓋し温泉論を案するは温泉

を固より衝動鎮靜排泄等の種々の直接ある作用を

あらしむるに又間接に専ら變質の効用はるものおれ

若誤り俄に多量を服し或は一時は數回入浴せら



ときは忽ち浴熱病即ち湯と發し食欲減損衰弱過度  
 脈行頻數皮膚乾燥發熱眩暈等の諸徴と来り又ブシ  
 ドラシアセルフリスと稱する浴疹と發するものと  
 り而して俗説は之を治病の効能を云ふ(を)其の初徴  
 とあるもの多しと雖ども是れ決して然るは非だ故  
 にも一此の如き証徴と認むるときは且らく其入浴  
 或は内服の數量を減し又數日間全く停止すべきと  
 而して予この泉は浴せる者と數旬且つ諸浴客の經  
 験せし所を聞くは十中の八九を皆去の泉は浴せる  
 ことと兩三日よりして飲食頻りに進み殊に渴と催ふを

あと甚だしく而して凡そ一週間と過れば飲食の量  
 を一めて本は復し病症を稍重きと加ふるは似たり  
 故に俗説は曰ふ第一週間は病と出し第二週間は病  
 と治し第三週間は疲勞を補ふと是す此れ地數十百  
 年来の經驗は係る所なりを記して以て浴客の参考  
 供せざるべからざ

○温泉湧出の来历 古来諸説紛々而して概ね皆荒  
 唐は属し里俗相傳ふ仁賢天皇の四年蚊島穗允君罪  
 有りて獄死す然れとも逆鱗未だ止まず其屍を  
 豆州熱海の海底に沈めしめたり此の時始めて此海



中ノ熱湯沸出して魚鱗介甲ニ未爛死スルヲ發見セ  
 りト准右親房ノ記ニ伊豆風土記ニ引テ云ク人皇四  
 十四代元正天皇養老年間開基モト而シテ其説ナ  
 未ダ詳クアリ比其後天平勝寶元年己丑箱根山金剛  
 王院第四祖万巻上人テ上方廣經一巻讀誦満足を故  
 世人呼テ万巻上人トシテ此年常陸鹿島ノ神宮寺  
 ヲ建ツ弘仁七年嵯峨天皇ノ詔ニ應シ上洛スルノ途  
 中三州楊那郡ニ至リ俄ニ辻化セ世壽スル靈湯ノ空  
 七十九歳箱根桑原村ニ葬ムルト云フ斯ル靈湯ノ空  
 一ノ海中ニ流散スルヲ惜ム且ツ鱗介ノ之ガ為ニ未爛  
 死スルヲ慙カス其泉脈ヲ尋ねテ之ヲ山腹ニ移シ開  
 キ其傍ニ少彦名神ヲ祭り藥師佛ヲ本地トシテ湯前

權現ト稱セリト其泉モ則チ大湯ニシテ權現ノ社今  
 日儼存モ其後宇多天皇ノ寛平四年壬子紀ノ長谷雄  
 當國ノ守トシテ此地ニ來リ泉原ヲ探ラんと欲シテ  
 深く地底ヲ穿テ一ノ穴ニ數尺ニシテ大石ノ面ニ數  
 穴蓮房ノ如キ水ノ湧ルヲ見ルのみ終ニ其源ヲ究ム  
 事ナク能ハズトシテ止ムト云フ此他種々ノ里説あり  
 と雖トモ多ク是レ妄誕不替毫モ記取スルニ足ル  
 水ノあり

○湯戸

湯戸昔々客屋ト稱シ今井渡辺等二十七戸ヲ限リテ



の業を営みたりしが今も自由は官許と得て博く四  
 来の浴客と宿泊せしむるものと得る之を温泉宿と  
 云ふ其數をべて三十余戸は此中昔時の客屋より今  
 戸は過き皆算とて温泉と浴室は引く即ち令井半  
 大夫真誠社渡辺彦左衛門富士屋喜右衛門と不盡閣相模  
 屋要作露木準三鈴木良三巴屋吾助菊屋五左衛門山  
 田屋彦四郎伊豆屋徳兵衛鱗屋平兵衛萬屋義助阪口  
 屋富八等を大湯と引き玉屋角玉屋中玉屋小川井屋  
 九戸屋大松入江伊勢屋等を河原湯は浴室と客と宿  
 せしむ蓋し河原湯は湯壺の傍は一大浴室を構衆客

是は混浴を海岸に此湯と引る一茅店の浴戸小林  
 古屋を清左衛門湯を引き且つ各家の庭中湧く所  
 の温泉と用る藤井澤口山口屋を小澤湯と用る此他  
 江戸屋高砂屋福島屋等皆各々其庭前湧く所の温  
 泉は浴室又浴室と義立し諸人として随意は混浴  
 せしむるもの四ヶ所即ち温泉寺の隠察は一ヶ所温  
 泉寺主の施浴は係る小澤町新宿本町各一ヶ所み亦  
 其町内の協立は係る其他各戸随意は算をこし以  
 て自家の用は供するもの牧拳をるは違はらば  
 ○浴室 各戸二三室或は八九室々毎は概ね三槽



と置き一を熱湯と引き一を冷泉と貯ひ一を冷熱調  
 和して入浴の用は供を又別は一槽と高処に置き底  
 或は横は小口を開き栓を用ひて其開閉を自由とし  
 以て局部の定すれる患者の滴浴は備ふる者あり近  
 古屋市郎左工門一室を設け算を以て小瀑布と引き  
 患者の滴浴は便を故は局部の患害はる人々時々  
 其室は入て此法を行ふも又可あり

○温泉宿の浴客を接する唯其席及び寢食等の什器  
 を貸すのみ而して飲食其他をすべて浴客の自辨は任  
 事を然れむ浴客各自の適宜は随ひ或は手酌の飲食と  
 調理一或は婢を雇ふて之と辨ぜしむみ亦随意た

○席は大小何れも陋美ありす。浴客の望は任を席費  
 一週間金三四十錢とり乃至二三圓の間たるべし席  
 已に定すれを食器茶具煙草盆等日用什器の類概ね  
 みお具ふ而して是等の器具を別は其損料を收めを  
 唯卧具と其品等も随ひ一週間金三四十錢とり乃至  
 一二圓の損料を受く。文政十三年七月山東庵京傳此  
 温泉園彙によれを亭主より湯料と時著したる熱海  
 七日の食料一人前金百足湯料とし銀二匁つと  
 定めと云々と見ゆ。僅は四十八又温泉料として一  
 九年と距て世事の變遷驚くべし。又温泉料として一  
 週間一人金七錢と納ると定とす。



○下婢をまきべて四十歳以上の老女よして朝来り夕に歸る能く万事は周旋して信實あり一週間金三十錢を給むるを法とす

○食料を米薪塩味噌炭茶の類皆巧くくわ宿よて之を購ひ置き浴客日用の需は應む蓋し魚類を除くの外を一切の物品は之と他方は仰き山海の嶮と跋渉して齋らむ所おれり其價をよより廉あらばと雖ども亦需用よ欠る事とあり

○山川名勝

熱海の地もととり山水の美観は富む近傍す名勝

舊跡多し記して以て浴客遊覧の便は供せざるべからざりアルトン氏曰く景色の变换も亦一二の疾病と治むるの効あり例へば鬱閉症の患者都市を去りて開豁の地に移り周囲の緑陰ある山水の幽景を遍覧して遂に快治するが如くと山川名勝の記をきと能くざる所以あり

○上野山 本町の北野中の湯のやとりと登る深泉録 林祭酒用韜の紀行前後二は曰く樵徑如線狐兔交跡披宿莽而上山頂古松數株駢列其下坦夷可坐眼界夾豁右山左海聚落田疇皆攢一指實為富覽之區而



委之草莽無有顧者、豈人情尊遠、賤近抑地之頭、晦亦有數耶、と真然り

○和田山 和田村の西南より禿より立るもの、おれふり峻峻のわり易いなり

○念佛山 和田山より連あり海に臨みて臥せ興禪寺の東數十歩の村路より登る登りて右より折るれを山

頂に至る一望をれを網代初島左右相臨ミ錦巖突元として眼下に在り房總相武の諸山遠く雲烟の如く

は出没を還り下りて山盡る所に至れを一茅屋あり之を魚見岬といふ常は一漁翁あり在り諸魚の来

往と候ふて釣漁の便とふ亦絶景あり

○入山 和田山の西北より連り數峯ありび秀び大幕小幕等の名あり相傳ふ昔より右大将頼朝陣營と此山

は張れり故は名くと山腹は風神の祠あり

○天神山 入山の山脚より和田水口二村の界は横たる昔より管公廟と建つ故は名く廟今濱町都松の

旧跡あり伊豆誌は古戦録と引て曰く僧正善祐熱海は在り時都を戀ひ手り一本の松を植え其枝と都

の方へ推し撓りつとふく繁茂して三十歩は横たり枝葉悉く西よりあびき侍るも怪しくあら



話ありとそめ松枯れて已ま久し

○絲川 日金山の下より出上流と宮川といふ

○初川 上流と入川といふ鷹の巢山より出づ

○和田川 和田山より出づ此他は細流をべて南

流して海に入る

○錦浦 念佛山の麓を廻り海岸をべて錦浦と称す

蓋し錦巖の靈區あるを以て此名と得たり魚見岬よ

り錦巖に至る海路幾んど半里海岸を石壁奇秀岸

下は碁磐石兜岩烏帽子岩等あり皆その形を以て名

く雀島と群雀噪ぎ馬背を亦と形を以て名く舟と

進めし馬背とめぐり西は折れし巖腹空洞石門と云

之と狗竇といふ又折れて一大石門を得る胎内く

ぐりと称す小舟を容るべし其巖角と電石といふ紋

理氷裂送りり落んとす其次を則ち錦巖あり絶壁數

仞下は巨洞あり洞中衆石五色錯雜して朝暾は映さ

れを燦爛錦の如し岩頂の老松と其根を石に挿さみ

雜卉黄翠その間を弥縫し真に奇觀あり其西石壁は

ましく峻し洞あり観音窟といふ其門甚だ窄く中を極

めて潤く且つ邃し一小池あり清泉掬まべし池を隔

て、巖の上は観音の像を安んず承應年間より日蓮宗の



僧某氏の建る所といふ洞中石乳あり又白蝙蝠多し  
 境靈ありて久く居るべからず此辺をべて曾我濱と  
 いふ故も亦曾我の窟とも称せといふ山以上熱海村の  
 ○日金山 伊豆山村は属を其絶頂を丸山と称し又  
 十國峠といふ熱海村より登るその山路を上宿の北  
 来の宮の東より取る登ること十町石浮屠數基あり四  
 面塔云ふ昔一僧正真然此に住せりと海僧正空是  
 たり右より折て登る一丁毎に石地藏を安下町敷  
 と記せり登る六と十一町四面塔あり戸澤地藏堂と  
 是泉隣大徳の開創は係る海大徳空在家僧あり之

と守る令堂宇荒廢觀るべし是より路傍ありに  
 雑木の目よさへさるふく羊腸屈曲雲と踏登る登  
 て四十町に至れ日金地藏堂あり此山仁徳天皇の  
 御宇松葉仙人といふもの開創を云ふ地藏堂何の  
 代に建立せしと詳りり又せむ相傳ふ鎌倉の右大将  
 之と中興し且つ田禄を附せりと頼朝覇府を定め  
 るおと能をさる憾を府下と送拜所と置て日令安  
 金地藏堂と称せり旧跡今尚不鎌倉に存せりと日令安  
 置る所の銅像も貞享中般若院聖算の造る所脇士  
 二童子を傳へて空海の作といふ堂前は閻王及び生  
 死河婆の石像あり古削觀るは足る守者在家僧と



六坊より今も源秀坊道正坊等四箇のみ相傳ふ箱根  
 の山賊般若院の僧某は化せられ得度して此に住せ  
 りと堂後又仙人塚より則ち開基松葉二世欄晚三世  
 金地三仙人の墳墓ありといふ是より更に登る六と  
 八町計熱海より通九山の絶頂と云即ち十國峠あり石  
 りり左の文と刻を曰く伊豆國加茂郡日金山頂所觀  
 望者十國五島自子至卯相模國武蔵國安房國上総國  
 下総國自辰至申其國所隸之五箇島及遠江國自酉至  
 亥駿河國信濃國甲斐國天明三年東都林居士諸島出  
 雲光英源清侯等應熱海里長渡辺房求之需建之と讀

了て頭を回ら一望をねむ四眺洞達一翳の眼と  
 遮るまゝ西の方富士山高く天半は秀で箱根足柄そ  
 の北は連なり甲斐信濃の諸山其間に出没し愛鷹山  
 を其左は時ち三島沼津の諸村碁の如く其麓は布く  
 官道の松富士川の流遠近斷續駿河の海濱は沿ふ正  
 面を重寺の灣を隔て真城天城諸山を望み更は頭を  
 東方より回らせは豆海相洋水天相接し熱海網代伊豆  
 山真鶴初島の諸勝近く眉間はつまり五島大島利  
 島及び房総諸山を遠く雲烟の如く隠現し三浦江島  
 大磯等其間を點綴し了景趣を添ふ謂ゆる目不周玩



情不給賞<sup>せ</sup>の真<sup>しん</sup>は海内<sup>かい内</sup>の絶<sup>ぜつ</sup>観<sup>かん</sup>あり此<sup>こ</sup>遊<sup>ゆう</sup>老<sup>ろう</sup>幼<sup>ゆう</sup>婦<sup>ふう</sup>女<sup>にょ</sup>の如<sup>ごと</sup>き竹<sup>ちく</sup>輿<sup>う</sup>を僦<sup>やと</sup>ふる乗<sup>の</sup>るも可<sup>か</sup>なり價<sup>あ</sup>金<sup>きん</sup>五十<sup>ご</sup>錢<sup>せん</sup>前後<sup>ぜんご</sup>あつべし然<sup>しか</sup>れども夏<sup>なつ</sup>日<sup>ひ</sup>を毒<sup>どく</sup>虫<sup>ちゅう</sup>多<sup>おほ</sup>し宜<sup>よろ</sup>しく心<sup>こころ</sup>と用<sup>もち</sup>ひべきあり

○伊豆山 伊豆神社の境内あり社もと関東惣鎮守と稱し古来朝野の尊崇篤く別當般若院を走湯山東明寺と稱し三千の支坊を領し天台真言二宗を兼統上下兩社は奉仕せり東鏡腕漏に伊豆神社の七堂伽藍焼失し一昼夜の間炎煙天と焦せることと記せり中古以來漸ゆく衰頽を極むと雖ども尚ほ社領三百石を領し社僧十二坊を存し堂

宇時々官費を以て修繕せられたりしが維新以來祿と失ひ坊を廢し且つ火災は罹りたれた上<sup>かみ</sup>の宮のみ僅<sup>わずか</sup>に其趣を存し下の宮を旧墟もす々求めがたきに至り嘗て鎌倉の右大臣が千早振伊豆の御山の王椿八百万代をいろむりたり續後と詠せられたるを今も虚言に属せしが如し此辺をべし古々井の森と稱し時鳥の古歌多し其一二を録せば拾遺集に清原元輔の歌として思ひ申るありあの森の翠はよそある人の袖もぬきなり」とりり後拾遺集に藤原兼房が五月闇あつあの森のわとぎは人あねむのそ



鳴こたる哉同トく大貳の三位が返一は時鳥よ  
 ゐの森は鳴く聲を聞よそ人の袖もぬれぬり扶木  
 集は惠慶法師の人の親の女も心やいりあらん  
 ありの森の秋の夕暮等あり社前の石階を下る  
 數百級より海岸は出れを温泉あり則ち走湯あり  
 又古歌多し江島屋相模屋等の湯戸三四軒み浴室  
 温泉の小瀑と設く清爽浴をべし此地熱海村と去  
 る東北十八町即ち小田原驛の街道よりへる  
 ○網代港 熱海村の南海路二里より多賀村を経て  
 陸行をべし則ち下田港に至るの街道あり然れども



遊覧の客を舟行と宜しと舟路を則ち錦浦を回り  
 曾我濱を経て港は達を港民戸四百余船舶多く繋る  
 東南山を越て根越の観音堂に至る曹洞宗長谷寺と  
 称す門前の観望も極めて奇絶あり本尊大和豊山  
 同木同作あり山下の巖窟より時々暴潮の為は  
 漂たざる僧實參之と憂ひ此寺を創建して此は遷せ  
 りと云ふ

○初島 熱海と去る海路三里東西七八町南北四五  
 町の一孤島より鎌倉の右大臣ら箱根路を我越く  
 進む伊豆の海や沖の小島は浪のよる見ゆと詠ぜ



られたる沖の小島と在是あり民戸四十餘多くて漁  
獵を以て業とある初島神社あり木花香初木姫を祭  
る此姫をドめて伊豆山の走湯を見出したまへりと  
云ふ此島到る處水仙花多し民刈り以て肥糞とある又  
文殊蘭あり高さ五六尺に至り花葉長大頗る目を駭  
くも又碩鼠の猫の如きものあり此他更し一切の獸  
畜を生ずることありといふ

○鸚鵡石 三島驛に至る街道の南十數町の地に在  
り田方郡丹那村に属す熱海と去る凡そ三里餘石の  
高さ一丈六尺餘横六尺餘よりて人語其他一切の音

聲の石は響く大と聲響の間一毫を容れず竹溪の  
記に竹溪西原彰明和中に記す曰く冷間記所稱南嶽岫  
巖峰之響石者欵と近來野火の災は罹り大に其響を  
減ぜりといふ

○一杯水 多賀村の地にて下田街道の傍より僅  
ま尺餘の小泉ありとも清く且つ冷ある大に水晶の  
如く相傳ふ右大将頼朝の地を過りしとき渴は臨  
て之を掬せりと此他駒形堂頼朝の馬と瘞云峰山頂  
り鉦子口鬢の澤在家僧之と守る等數多の旧跡あり  
とも今悉くを記さざ



○社寺并行殿旧墟

此地昔々伊豆神社の社領たり故に嘗て般若院の盛んあるや三千の支坊多くをこの辺に散在し隨て種々の神社も多し是れ此小村にして社寺の數甚に多き所以あり

○湯前神社 上町より天平勝寶中少彦名尊を祭

祭神の説述來異論ありといふ然れども予を固より神祇の事と詳しうせざれを且らく旧説に依る下より世々石渡氏神事と掌とる社前より石碑より本社の來歴と畧記を文を信陽源通魏の撰にして書て江戸の東江源鱗と見ゆ明和七年九月石渡親由の建

る所あり石華表及び石燈籠二基とも寶曆安永の頃又留米侯の寄附する所あり

○來宮 上宿の北より五十猛尊を祭る熱海村の

鎮守あり和銅三年の創立と係るといふ境内は大豫樟樹二株あり神木と稱せり大さ九十五六圍中身空洞ありて數人と容るべし

○和田八幡 錦浦の西端和田磯より傳へて源頼

家の信仰する所と云々今僅に其旧墟を存す

○今宮 天神山の南より事代主尊を祭る和田村

の鎮守たり老樹群立清陰蒼々たり



○天神祠 濱町の東より菅公と祭る相傳ふ菅公  
 築柴は謫居せらるる日自う肖像七軀を刺したる  
 ふ本祠祭る所その一ありと祠と和田の天神山は  
 たり近古以来今の地は遷り内田氏神事を管さ  
 ○紀の村の本の社 横町御成橋の南に在り柿の本  
 の紀僧正と祭る聖俗相傳ふ紀僧正真濟嘗て深殿后  
 の事坐せりきて此は謫居し終り死せりと此傳甚  
 だ誤れり僧史と按ざるは釋真濟を山城の人彈正大  
 弼紀の御園の子にして弘法大師十大弟子の一あり  
 承和中勅と奉りて入唐し歸朝して東寺の長者に任

ト又僧正とあり貞觀二年二月廿五日高尾神護寺に  
 遷化せといふ本朝高僧傳の論は曰く世人傳曰真濟  
 惑色而成魔焉余常疑之畧中真言傳所引善家秘記始  
 決疑矣曰金峯山比丘咒藤后之病見其容顏愛慕而作  
 鬼魅入帳中夫清行時之鴻儒而見聞不誤其不関濟公  
 必矣云々と此説以了謬傳と正き足る而して未だ  
 此地何よ由て此僧正と祭るを詳らうとせざ紀の  
 の事より轉訛せし又濱町天神祠の境内より一石  
 と傳へて深殿后の陵墓とあまぐ如きは至りてそ  
 の傳會の甚だしき固より論ずるは足るものあし



○温泉寺 清水山と称し新宿より臨濟宗妙心寺  
末あり勅謚神光寂照禪師授翁宗弼和尚の開創に係  
る和尚を万里小路中納言藤房卿あり僧史を按る  
又卿を亞相宣房の子嘗て禪學を喜び退朝の暇を  
明極俊及び大燈國師に参り建武元年潛遁して比  
岩倉に至り出家す時年三十八延元中関山國師妙  
心寺を開くは當り往て法脈を傳へ遂に妙心第二祖  
とあり天授六年三月廿八日端坐して化す時年八十  
五万治二年秋勅謚して神光寂照禪師と曰ふと見ゆ  
和尚の未だ出家せざる後醍醐天皇は仕へ了力を中  
興に尽されしこと未だ已む世人周知する所なれども

こ子贊和尚の傳衣紹金の七條一肩より寺の什寶  
と在又中興雲居國師の九條衣及び念珠を藏す雲居  
の興禪寺の庭前は古松一株あり幽翠人を襲ふ傳へ  
て開祖の手植と云門前は古井あり三点水と名く  
蓋し唐の悟達が靈水と三点して奇疾を治せとい  
ふ故事に依り雲居の命を所して熱海第一の甘  
泉ありといふ支坊慈照庵上宿より俗に湯河原堂  
と稱し本尊地藏大士を安んず相傳ふ治承年間右大将  
頼朝の開創に係ると延寶二年江戸の人久保田某  
た堂宇を興て而して今の堂を安政中温泉寺主雪源



其檀越石渡喜右衛門等の諸氏と謀りて建る所あり  
 平沢悌侯の撰る所の温泉  
 寺記一篇有り本寺に載せり  
 ○興禪寺 和田村念佛山の麓より海岸山と稱す  
 温泉寺と同ト授翁和尚の開創に係る寛永年間雲  
 居國師中興を雲居國師年譜と按ずるに師諱と希膺  
 土佐の人十五歳より出家し法を一宙和尚と傳ふ  
 元和元年塙直之の為に大坂城に屯し死を決す東照  
 公の容を得て妙心第一座とより又諸方を歴住し寛  
 永七年の春遁れて熱海に至り興禪温泉二寺を中興  
 すと同一く十一年元和法皇の勅請に應じ奏對旨は愜

ふ十三年仙臺中納言政宗の請に應じて松島瑞巖寺  
 と中興す承應三年後光明天皇勅じて慈光不昧禪師  
 の号を賜ふ万治二年八月八日端坐して化す壽八十  
 八享保十九年六月特に勅じて大悲圓滿國師と謚し  
 賜ふ國師生涯諸方と巡化し山を開き寺を興すもの  
 総て百七十三ヶ所よ及ぶといふ惜むべし當寺志を  
 志す火災に罹り開祖及び中祖の遺物多く焼亡を然  
 れども尚本尊十一面觀音長三寸を藤房入道の護  
 念佛に係り又雲居の法衣及び自贊の畫像等有り支  
 坊延命庵神光庵にふ僅し旧墟と見る 平沢悌侯の記



見ゆ亦さ藤房入道手植の松入り大々牛と蔽ふべし  
 等も焼け雲居國師手焼さり又入道遺愛の鞍及び念珠  
 植の松も今を枯たり  
 ○海藏寺 又妙心寺末より水口村より佛徳廣通  
 國師と開祖とし悟庵潛溪二師と中興とをまふ其時  
 代と詳らませ境域瀟灑遊觀をるは堪へたり  
 ○警王寺 善述山と稱し濱町より昔を真言宗よ  
 して伊豆山の末寺あり慶長十八年播陽大教禪師物  
 外和尚中興し妙心寺末とある相模の早雲寺は藏を  
 札中は相州熱海警王寺云々の語り之は依り之を  
 觀れそ此寺當時已に臨濟宗の語り相模の早雲寺の末は属  
 とせりと知るべく又熱海村の地嘗て相模に属せしと  
 とらるる微をべしと雖も令皆其記と得を惜むべし

一と境内に大田駒千代の墓あり駒千代を左衛門尉  
 道灌の玄孫よして旧掛川侯の祖新六郎重正の兄と  
 り永祿七年八月當寺の境内に自殺す時年僅に十四  
 歳ありしと云ふ

○朝音寺 之と和田村に在り妙心寺の末ありしり  
 近年廢絶して其跡もすく求め難し  
 ○大乘寺 本町湯前社の上より通廣山と稱し日  
 蓮宗三島驛本覺寺末あり此寺と真言の道場あり  
 一は弘長二年の春日興上人六人の一來り住僧行滿  
 と化度一衣と更へ宗と轉せしむ此は於て行滿名と



日行と改め興と請いて開祖と自ら第一世に居れり時より日蓮上人當國伊東に謫居せられ此盛事と聞き嘗て四十二歳の容貌と水鏡に写し自ら刻せしる所の肖像を興に附与し當寺に安置せしめらるる今本尊前安置せしるものは是なり又日蓮弘安の歳日親文明の歳二師の書せし曼荼羅を藏す本堂の後直に月と記せし登る石階數十級七面祠あり眺望極佳境内は朝川黙翁の墓あり門前は其子善庵が建る所の碑あり文を龜田鵬齋書す大窪天民篆額を増山河州より梵鐘より文化年間鑄る所といふ

○誓欣院 法界山と稱し上宿より昔を真言宗と

了道光寺と稱す正保慶安の頃浄土宗僧善譽誓欣來り中興して明珠庵といふ後村民その徳を慕ふて誓欣院と呼びしと今を東京増上寺の末とある寛政年中住僧聽察村長今井半太夫は謀り寺を今の地に移し湯前社の東京蟠龍寺知本と請ふ本これと長泉院の徳門普寂は譲り始めて律場とあり寺域と結界す本尊阿彌陀佛相傳ふ惠心の作しす千葉常胤の持念佛ありしと隸する所の觀音堂荒宿よりと觀音の銅像百体を安む近年災は罹り今僅に



五十軀と存をといふ

○行殿旧墟 新宿の南より伊豆誌に曰く猷廟川

三代将温泉と浴せんと欲し玉ひ寛永三年佐久間氏

軍家光命と之と營せしむ既に成る適事ありて台駕

遂に臨す其後令して毀すしむ是より先き慶長九年

三月神祖五郎太丸義利長福丸頼宣と携さへられ京

に上り王ふ時熱海を經過し温泉に浴しすふこと

一七日猷廟この例と追ひ玉ひしむと當時造営は

關せし圖書類渡辺氏に藏せりといふ予内田氏が藏

せる寫本に就て之を見たり其地五反餘熱海村の中

央よりより平坦より眺望殊に佳絶あり西北老樹

列あり茂り其外に溝と回らせし跡あり此辺里俗又

傍らに馬場の跡あり近來此旧墟に就き熱海學校を

建築せり校舎壯宏學事稍盛榮の色ありといふ

産物

熱海の地甚に狹隘三方山と回らせとも皆秃峯一方

海を開くとも僅に釣漁は止まり田園耕作の地は

乏し況んや爾餘の品物と産生するの餘地は

蓋し日工集を按むると曰く應安七年二月十七日為

湯醫往熱海中余乃次其韻題温泉廣濟接待庵の事蹟



詳らりありし或人曰く今の温泉 曰く温泉乱浴汗淋浪  
 寺是ありんと蓋し或ひは然らん 接待知消幾杓湯病客毎今鰲店榻詩人偏愛賛公房陶  
 成什器輕於工煮出官塩白似霜暫借僧窓同遠眺東南  
 目断水茫茫と此詩五六の句よいふ所よ依て五百餘  
 年前よの地よ於て磁器を製し且つ塩と産せし出と  
 明りあり因て之と古老よ問ふ昔一阪町の上二軒  
 茶屋よ於て盛んよ磁器を製し又今の横磯と称する  
 辺みち塩田あり 又塩釜と称然るに磁器を製する  
 者何の頃より其人多く塩田を皆暴潮の為よ奪  
 ひ去られたり 近來内田氏古きを興さんと欲し種々

子力を盡しられとも遂よ未だ其功を果さざると甚た  
 惜むべしと亦而して令製産する所のものを僅よ  
 樟材什器雁皮紙壁土等の兩三種よ過む  
 ○樟材什器 材料を多く天城箱根諸山より出づ製  
 する所の器具頗ぶる多し中よ就く箆筒書棚書物箱  
 用書箆筒針箱煙草盆廣蓋机火鉢等を尤も有用の具  
 あり其他玩弄よ属するもの數多られとも悉くを記さ  
 ず而して之と製するもの及ひ之を驚き賣る者亦十  
 數家あり中よ就く古來其業をさるんよ當あり今亦  
 ほ益々怠たざる者遠州屋庄右工門丸屋喜平福



田屋安二郎等ありとのり各家より轆轤製のりの塗物類等を併せ賣る又青木かよび柳よて製したる箸数種より何れも浴客滞在中の需は應お何様より製をべし

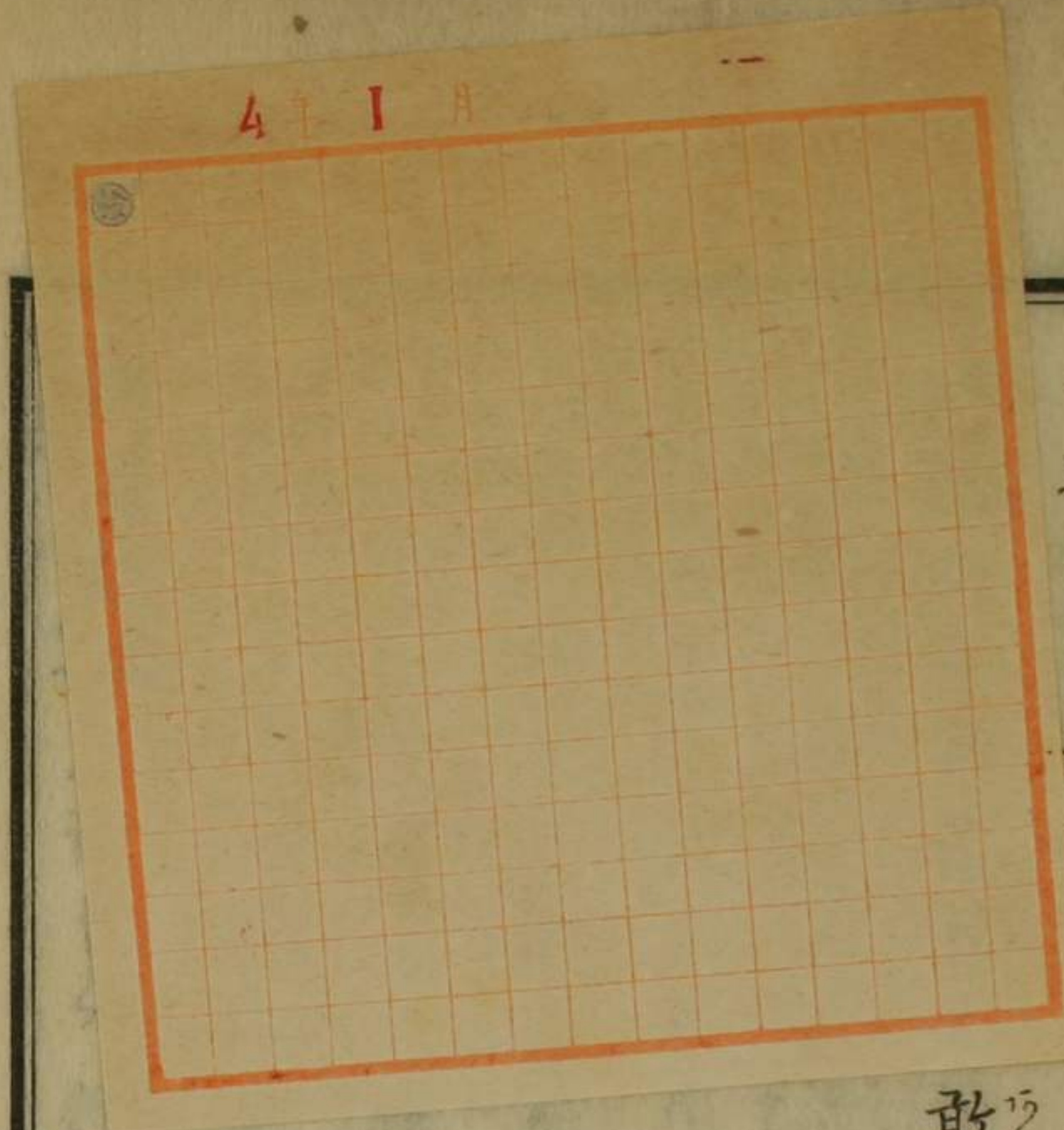
○雁皮紙 地棉を用ひて之を抄く地棉を和名をかごと云ひ俗にガンピと称す木は櫻に似て四月葉を生ぎ此木處々の山間より生れとも十年を経ざれば用とふさぎ故に三叉楮を雜つて之を抄き唯薄葉と稱すものも純一の地棉を用ひて之を抄き熱海におおて此紙を製し初めたるを柴野栗山の創意より出で今

井半太夫 莪齋より徳翁と此業を起し江戸本町一肆を開き又金花堂榛原等へ分ちて之を發賣せり爾來この業と營むもの漸く多く殊に方今を今井半太夫江戸屋吉兵衛植松五平神角善吉芥川由五郎等專てら力を此に盡さといふ

○壁土 熱海の地山溪田園到處往々この土を生じ青黄赤白その他の間色凡そ十七種ありみま壁と塗りて美しく且つ堅く中は就く金色及び銀色のものより光彩燦爛宮室の美觀を添ふは足る年来山田万吉と吉田屋といふもの此土を賣るを以て業とあり常



東京その他へ運輸するもの甚だ夥多といふ○こ  
 の他赤石脂薬用は供○塩温石鑛泉中は含む所の加  
 自然は石の如○乾魚等の賣品われとも其品少或  
 くありしに○敢て記さざ



明治十一年九月十八日版權免許

著述并出版人 埼玉縣平民 大内青巖  
東京築地三丁目 十八番地寄田

發行 眞誠社  
豆州熱海温泉宿

同 石渡喜右衛門  
同

賣捌 山中市兵衛  
東京芝神明前

同 博聞社  
同 銀座二丁目

同 吉川半七  
同 南傳馬町二丁目

同 山内宗太郎  
同 八官町



東京その他へ運輸するもの甚だ夥多といふ○この他赤石脂薬用又供○塩温石鑛泉中又含む所の加自然石の如○乾魚等の賣品られとも其品少或を尋常のそのふれを敢て記さざ

熱海誌終

明治十一年九月十八日版權免許

著述并出版人 埼玉縣平民 大内青巖

東京築地三丁目十八番地寄苗

發行 眞誠社

豆洲熱海温泉宿

同 石渡喜右衛門

賣捌 山中市兵衛

東京芝神明前

同 博聞社

同 銀座二丁目

同 吉川半七

同 南傳馬町二丁目

同 山内宗太郎

同 八官町



